

表3 実践前の教師の意識

教師の意識	人数
やってみたいが、障害児の実態を知らないので不安だ	22
特支学級担任にTTで入ってほしい	21
インクルーシブ体育も通常体育も同じだ	18
やりたいわけではないが、特支担任に頼まれた	18
できればやりたくない	4
やりたいと思っていた	3

3) システム・制度

インクルーシブ教育は、公的な教育制度の再編をめざしていると言われている。しかし、教育制度は旧態依然のままである。人員の配置はなく、特別支援学級には複数の学年が在籍しており、加えて通常の学級の児童の対応まで引き受けねばならない状況にある。そのような中で、特別支援教育の担当者がTTとして通常の学習支援に入ることとは無理である。

4. まとめにかえて

インクルーシブ体育への期待は2つある。一つは、運動が得意な子どもや苦手な子ども、障害のある子ども等と一緒に学習するための、場づくりや練習法の工夫、ルールの調整、等の「知恵」の習得である。もう一つは、活動する中で、周囲の人の「人となり」を丸ごと理解し、かわり方を見つけていくことである。インクルーシブ体育を実践していくと、これらの成果や効果を得ることができる。しかし、システムや制度、教師の意識によっては、衰退の一途をたどることが危惧される。

インクルーシブ体育を推進していくためには、インクルーシブ体育の事例を広く集めることが急務であると考えられる。「知」の集積である。そのことによって、インクルーシブ体育でめざす目的や授業の進め方、種目の問題、ルールの問題、準備の問題等を、授業実践を通して研修できるからである。成功事例から学び、それをアレンジすることでインクルーシブ体育の可能性が広がっていくものと考えられる。

文 献

- 1 長曾我部博 (2006) インクルーシブ体育における「まさつ」が子どもの相互理解に及ぼす影響。障害者スポーツ科学, 4(1): 37-46.
- 2 長曾我部博・草野勝彦 (2006) 小学校教員のインクルーシブ体育に対する態度と態度変容に関する研究。宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要, 14号: 1-11.
- 3 草野勝彦・西洋子・長曾我部博・岩岡研典 (2007) 「インクルーシブ体育の創造」～「共に生きる」授業構成の考え方と実践。市村出版。
- 4 宮内孝・久徳理恵・鈴木理 (2001) 友だちとかかわりながら楽しむソフトバレーボールの実践。体育授業研究会, 4: 56-63.
- 5 宮内孝 (2006) 戦術的な判断をやさしくしたゲーム教材づくりを ～ソフトボール型の教材づくりを例に。体育科教育4月号: 34-37。大修館書店。

知的支援学校における インクルーシブ的体育の可能性

大阪府立高槻支援学校

下井 一夫

1. はじめに

支援学校では障がいのある様々な児童・生徒に対して、何らかの授業形態で体育が行われている。そのため本校のような支援学校で行われている実践は、通常学級でインクルーシブ体育を実践する際に、特に教材開発に当たって有効な手立てを提供するものと考えられる。

そこで本稿では、各種支援学校の中でも知的支援学校で行われているインクルーシブ的な体育の現状を ○学習集団の編成とねらい ○教材の適性化 ○親和性を高める試合形式 の3点から述べたいと思う。

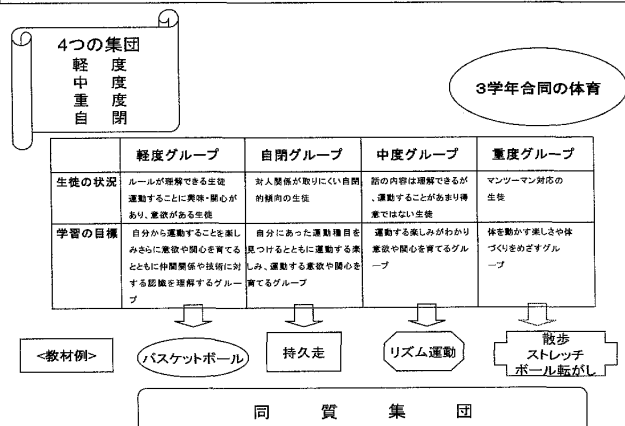
2. 学習集団の編成とねらい

調査できた大阪府内の知的支援学校で行われている体育の学習集団の編成を概観すると、大きく分けて 〇個のニーズにあうように児童・生徒の発達・課題に応じて同質の学習集団を編成しているケース 〇様々な障がいのある生徒が混在する異質の学習集団を編成しているケースとがある。前者の学習集団の編成には、3学年合同のものと学年単位のものがある。3学年合同の体育は、比較的学年の生徒数が少ない中学部で行われ、学習集団は発達・課題に応じて3～4つのグループに編成されている。また学年体育は、生徒数が比較的多い高等部でおこなわれ、学習集団を2つぐらいの発達・課題別のグループに分けて行なわれている。また学年体育では、生徒間の相互理解をより深める事を狙いとして異質集団で行われていたりする。このように学年体育では、常に学習集団が固定されているわけではなく、教材によって同質集団または異質集団が使い分けられて指導されるケースがみられる。次にそれぞれの学習集団で行われている授業の展開例についてみてみよう。

① 3学年合同の体育授業（同質集団）

グループによって学習目標が異なることから、準備運動の段階から主運動にいたるまで別々に展開される事が多い。そのため様々な障がいのある生徒たちが同一空間・時間で体育をしていても交流することはほとんど見られない。

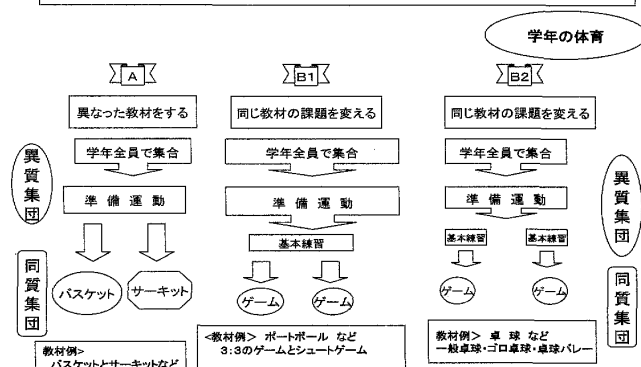
発達・課題別集団での学習の展開例



② 学年の体育授業（同質集団）

準備運動、または基本練習までは一緒に行うが、試合などのゲームは発達・課題別に行われている。教材例として、ポートボール、サッカーなどがある。どちらにしてもこれらの学習の展開例は、長曾我部氏によるインクルーシブ体育の形態でいえば、第2、第3段階に相当するものである。

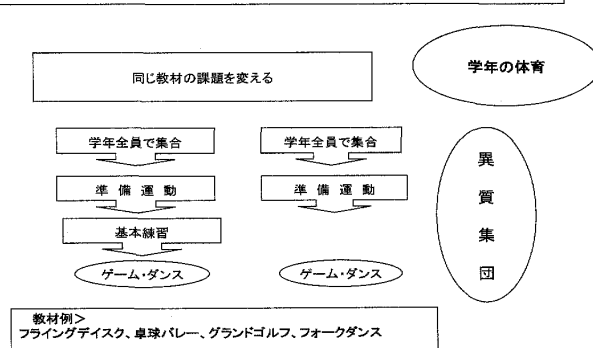
発達・課題別集団での学習の展開例



③ 学年の体育授業（異質集団）

準備運動からゲームまで全ての生徒が一緒に運動するケースである。インクルーシブ体育の形態でいえば第4段階に相当するものである。教材例としフライングディスク、グランドゴルフ、卓球バレーやフォークダンスなどがある。

障がいを超えた集団での学習

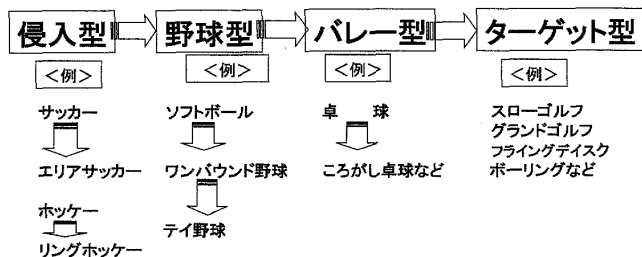


3. インクルーシブ体育への適材化

ボール運動は、チームでプレイするために生徒間の相互理解がしやすい教材である反面、自閉症

インクルーシブ体育への適材化

<ボール運動の場合>



などの発達障害のある児童・生徒にとって扱いにくい運動でもある。

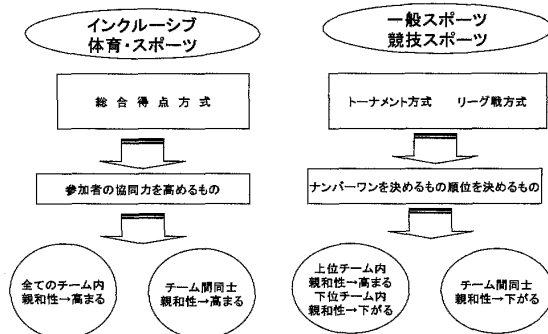
ボール運動は、侵入型、野球型、バレー型、ターゲット型に4分類されるが、ここでは比較的他の仲間とともに協力、相互理解しながら比較的一緒にプレイしやすい型（適材性）について、また同一の時・空間で障がいの程度を超えてみんながプレイできるように工夫すべき点（適材化）を述べたい。図のようにサッカーのような侵入型よりも野球型が、さらに卓球のようなバレー型よりもフライングディスクのようなターゲット型の方が活動の見通しが持ちやすいので発達障害のある児童・生徒たちを含めて、自分のペース（リズム）で行うことができやすい。しかし侵入型のボール運動であっても、ボールが三次空間を移動するバスケットボールよりも二次空間を移動するホッケーの方が、さらにフープで移動を制限し、自分の前に来たボールだけを扱ったリングホッケーの方がより多くの者がゲームに参加しやすくなる。このように野球型やバレー型であってもボールの大きさを変えたり、ボールを二次空間を移動させたり、移動をフープで制限するなどのルールを工夫することでより多くの者がプレイを楽しむ事ができるようになる。

4. 親和性を高める試合形式

試合をする際、勝敗を決めるためにトーナメントやリーグ戦形式で行う事が多い。しかしチーム内の親和性が高まるのは、一部の上位チームだけで対戦チームとの親和性は、ほとんどみられない。

そしてチーム間においては、お互いを讃えあうことよりも勝ち組、負け組といった優劣の感情がもたらされる傾向が強い。そこでチーム内、及びチーム間の親和性を高めるために、それぞれのチームが得点した点数だけの総和を加算する総合得点方式を考えた。ゲームは、相手と得点争いをしながらも、それはお互いが共同で、総得点を増やすという目的のために行われる。そのため、この方式は、チーム内の協力関係や、対戦する相手チームとの親和性がより高められると考えられる。

学習集団の親和性(評価)



子どもたちの満足度と インクルーシブ体育 養護学校（知的障がい児・現：支援学 校）・小学校の実践報告及び教員志望 学生への課題から

大阪国際大学

湯川 静信

1. はじめに

古い話になるが、昭和50年頃より障害児体育・スポーツ研究会等が開催される中、養護学校（現支援学校と名称変更の学校もある）では「養護・訓練」と「体育」の違い等検討され、体育の目標の明確化が論議された。また「体育」の名称を「からだ」等にひらがな化し、「身体の体育」